Japan Comparative Literature Association
JCLA
日本比較文学会

日本比較文学会九州支部 NEWSLETTER

2022 年 11 月 20 日発行
第 1 号（創刊号）

日本比較文学会九州支部 HP: https://homepagekumadai.wixsite.com/kyushu-shibu
日本比較文学会九州支部事務局: 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744
九州大学大学院比較社会文化研究院 松枝佳奈研究室
knmatsueda@scs.kyushu-u.ac.jp

目 次

p.1 巻頭言（清水孝純）
p.2 研究余滴（千代田夏夫）
p.3 書評（大國眞希）
p.4 書評（大場健司）
p.5 秋季大会プログラム
p.10 会員短信

巻頭言　島謹遺訓

清水孝純（九州大学名誉教授）

島謹とは俺のことかと島謹いい。いうまでもなく島謹とは島田謹二先生のことです。しかし我々仲間ではもっぱら島謹でしたね。誰も島田先生と呼ぶ人はいない。もちろん先生に面とう向かっては先生ですがね。というわけで、ここでは島謹とお呼び致します。言うまでもないことですが、この呼び方には限りない敬慕の響きがあるのです。

元来比較文学は今でこそ堂々と大手を振るって大道を闊歩していますが、島田先生のころはまだその存在理由がうさん臭いものに思われていたようです。ある仏文の東大教授は有名な比較文学天麩羅そば論で揶揄しましたね。つまり比較文学は天麩羅でもなければ、蕎麦でもない。折衷的なものというわけです。しかし島謹はそんなことでめげるような人じゃない。先生は文学研究にエクスプリカシオン・ドゥ・テクスト（explication de texte）という方法を基本的な方法とし、更に方法に関してはすべての方法を学べと言っていましたね。これは非常に重大な発想じゃないですか。ただいずれの場合もこのエクスプリカシオン・ドゥ・テクストが基本的な方法です。先生がこの方法をわがものにしたいきさつはなかなかなものでしたね。ドラマチックなものでしたね。先生は元来が英文学者です。ところが英文学研究ではフランスの研究が面白い。そこで先生はルグイとかカザミアンといったフランス派の英文学研究にひかれ、さらにこの派の成功はその方法にあるということを推察されたのです。つまりエクスプリカシオン・ドゥ・テクストですが、これはテクストのもつあじわいを徹底的に引きだそうというものです。ためつすがめつテキストにせまろうというものでしたね。

"エクスプリカシオン・ドゥ・テクストですが、これはテクストのもつあじわいを徹底的に引きだそうというものです。"

しかし島謹先生の発想は比較文学というとあれとこれを比べるという先入見的志向なんかから、遥かに大きい視野に文学研究を飛躍させたと云う事です。先生の講義で一番心に残っているのは広瀬武夫の研究ですね。広瀬武夫といってもいまの人は知りませんが、日露海海戦では有名な話です。旅順攻略に際して、旅順口を日本の船を沈めて閉塞するのですが。二回目に部下の杉野兵曹の姿が見えない。そこで広瀬はもどろうとするのすが、敵の猛火を浴びて海中に死没するのです。この話は、戦前は有名なものでしたね。歌もあります。（次ページにつづく）

（前ページのつづき）しかし僕の話はこれからなのですね。というのは「杉野やいずこ」というのは単なる部下思いではない、もっと深い人間愛からだというのですね。というのも、広瀬武夫はロシアに駐留武官として滞在していた時、ロシアの女性と熱烈な恋をしていたというのです。その証拠は二人のあいだに取り交わされた恋文でした。島謹先生はそれを東大図書館の蔵書の中に見つけたのです。それをコピーして授業に使ったのです。これには驚きもし、感動しましたね。島謹先生が通常の比較文学の枠を遥かに超えて、いかに自在に生きたかはお判りでしょう。やがて秋山真之研究に歩度を拡げます。これは明治という時代を生きた若者たちの、実に覇気に満ちた、溌剌たる物語です。最後に先生の遺訓、比較文学は自分の生きる道だ。生きる道、これは私の心にたえず鳴りやまない島謹遺訓ですね。

"比較文学は自分の生きる道だ。生きる道、これは私の心にたえず鳴りやまない島謹遺訓ですね。"

研究余滴　鹿児島十年

千代田夏夫（鹿児島大学）

私にとって錦江湾（鹿児島湾）を挟んで向かい合う薩摩半島と大隅半島は、いささか大振りではあるが、やはり逆さにしたウェスト・エッグとイースト・エッグである。マンハッタン郊外ロングアイランドの北に向かって突き出す二つの小さな半島グレート・ネックとマンハセット・ネックをモデルとした「ウェスト・エッグ」「イースト・エッグ」を舞台に設定して、F・スコット・フィッツジェラルドが『グレート・ギャツビー』を上梓したのは 1925 年 4 月 10 日、作家 28 歳の春である。五年前に貧しさゆえに恋人デイジーをあきらめた主人公はジェイムズ・ギャッツの名を捨ててジェイ・ギャツビーとして生まれ変わり、彼女に相応しい巨万の富を築いて海辺の豪奢な館を手に入れる。湾越しに立つ今は結婚したデイジーの屋敷、その桟橋の緑の灯を毎夜眺めて再会を待つ、気の長いといえば相当に悠長な話である。

2012 年の春に鹿児島大学に着任して丸十年となる。私の故郷は京都だが生まれて後一年を過ごしたのは母の郷里であるここ薩摩の地、曾祖父が東京から鹿児島大学の前身旧制第七高等学校造士館に赴任してきたのが大正 10 年の 1921 年、百年前のことでそれ以来の鹿児島との縁である。このところはT・S・エリオットの『荒地』（1922）や『ギャツビー』など金字塔的作品の刊行百周年が続くが、モダニズムと鹿児島と自分という縁をついこじつけてみたくなる。暑いから根付きませんよという植木屋さんを説き伏せて、小さな庭の、ちょうど海の覗く手前にはまなすの木を植えて、紅い花を水平線の上に咲かせて中村草田男の「玫瑰（はまなす）や今も沖には未来あり」の句を見立ててみる。床は歩き回るたびにぶかぶかと音を立てて沈む陋屋である。夜には小さな小さな燈台の緑の灯がおちこち瞬く。日が昇れば薩摩半島側のこちらから対岸の大隅半島が霞む。フィッツジェラルドが没した四十四歳を私は越えた。（次ページにつづく）

（前ページのつづき）晩秋から冬に向かうこの季節、掃く手もないまま積み重なった落葉を突き破って、ソクソクと水仙の濃い緑色の葉が立つ。庭に遊びに来る猫たちは、暮れあたりから白く花づく水仙守の務めも果たしてくれているようだ。十年の内に、長年格闘しているフィッツジェラルドからその盟友ヘミングウェイ、彼らの先輩格であるコスモポリタンのウォートンから十九世紀の「南部」作家ポーまで研究の範囲もごく自然と広がった。職場の同僚と学生諸氏に恵まれてのことである。「しんしんと肺碧きまで海のたび」。薩摩半島最南端の長崎鼻に句碑の立つ篠原鳳作（1906–36）の七高時代に句作を勧めたのは自分であると私家版の回想記に曾祖父が記していたようにも思ったのだが、堆積するばかりの新旧の本に埋もれて、いまは確かめるすべもない。了

書評　大嶋仁『科学と詩の架橋』（石風社、2022）

大國眞希（福岡女学院大学）

本書の上梓の理由について「私たちの教育制度は文学テキスト解読ができない科学者を育て、科学的思考のいろはをも身につけていない文系の人間を育てつづけている。このような現状を鑑みて、私は本書を問うことにした」と「あとがき」に明言されている。

2022 年度実施の学習指導要領に基づき、高校で「文学国語」が選択科目となったことを契機として、「文学」について活発に議論がなされたことは記憶に新しい。また、国語教育史を繙けば、学習者に一元的な価値観を強制しようとする教育から、言葉を手掛かりにして現実と記号との関係を客観的に解明していこうとする「科学」的な教育へと変化し、「科学」的な手続きに準じる教育実践が多く試みられた時期もあった。そして、更に、ここ数年のコロナの蔓延によって、学習教育環境ばかりでなく、〈主体〉そのものが、大きく変容を促された。現在は時代が動く、ある種の分岐点にある。まさに機宜に適した書と言えよう。本書では、シモーヌ・ヴェイユ（代数と詩）、レヴィ＝ストロース（新しい科学）、寺田寅彦（俳諧と物理学）、岡潔（数学と詩）、宮澤賢治（科学と宗教と詩）が取り上げられている。個々の逸話や在り方はもとより、（レヴィ＝ストロースの書名『野生の思考』の pensée が思考の原初型と共にスミレも意味し、岡潔が数学者を野に咲くスミレに喩える発想と結びつくなど）時としてそれぞれが繋がってゆく動態もまた、とても魅力的に映る。

著者は「言語という監獄」（「敍説Ⅲ」20 号）で「科学万能の時代、もはや科学技術を抜きにして文学を語れないということも認めねばならない」とし、レヴィ＝ストロースを引きながら、「私たちにとって重要なのは科学の言語を捨てて詩的言語に戻ることではなく（そうしたことは不可能である）、この二つのバランスをとることだ」とも書いている。（次ページにつづく）

本書では寺田寅彦が「詩歌と科学を総合する道を模索しつつ、そこへ性急に至ろうとせず、両者のあいだを行ったり来たりする」往復運動をおこなったと紹介され、「連句を西洋的文脈で説明する可能性を追求し、その結果、西欧の前衛芸術や夢の理論に光を当てる」彼の「映画芸術」に関する主張こそ、「科学と芸術との架橋のモデル提供」であるとも指摘されている。科学と芸術とはどちらかがどちらかを凌駕するものでも駆逐されるものでもない（タイトルの「架橋」には“Reflections”が充てられている）。

文学の芸術性を感じさせるものとして換喩のはたらきがあるが、著者によれば「自然科学や数学においても、メタファーが土台にある」。エデルマン曰く「人類はまずメタファーで思考し、数理を学んだ大人においてもそれが思考の中心となる。だからこそ、想像力や創造力を発揮できる」（『第二の自然』）。今や、ＡＩが発達し、俳句や短歌、小説をコンピューターが制作する時代だ。お題を指示すれば、機械がそれにあった絵画を描いてみせる。本書を読み終わった後、生物学や解剖学にも精通したレオナルド・ダ・ヴィンチを彷彿とさせる、木彫刻家の大竹亮峯の作品「月光」が生み出す芸術性にも想いを巡らせた。本書は、現代において芸術とはどのような営為を指すのかについて考えるうえでも示唆に富む。

書評　松枝佳奈著『近代文学者たちのロシア—二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公』（ミネルヴァ書房、2021 年）

大場健司（九州共立大学）

本書は、二葉亭四迷（1864–1909）、内田魯庵（1868–1929）、大庭柯公（1872–没年不詳）の「ロシア研究」を比較文学・比較文化の視座から論じたものである。二葉亭四迷と内田魯庵はしばしば両者合わせて論じられるが、ここに随筆家・新聞記者である大庭柯公を加えたところに本書の独創性がある。大庭と言えば、これまでは鶴見俊輔（1922–2015）らの「思想の科学研究会」会員であった山領健二（1933–）の評論で扱われてきたが、本書ではどのように論じられているのだろうか。次に本書の概要を示したい。

本書は全 3 部で構成されている。第 I 部「二葉亭四迷のロシア—志士と文学者の両立」では、「文学者」（文士）としてのみならず「ロシア研究者」（志士）としての二葉亭の作家像が提示されている。二葉亭が留学を経ずにロシア語能力を身につけた背景には、東京外国語学校露語科での「正則」（ロシア語での直接法）によるロシア語教育があったという。また、ここでは二葉亭の談話記事や手帳、二葉亭が購読していたロシア語新聞・雑誌など大量の資料が調査されているのも特徴的だ。思想方面では、二葉亭の「帝国主義」が国家主義者の対露強硬主義とは一線を画すること、及びその「社会主義」が「個人主義」と対立するものではなく、むしろ個人の自由を尊重するものであったことが示されている。（次ページにつづく）

（前ページのつづき）
第Ⅱ部「内田魯庵のロシア――啓蒙と思想・言論弾圧への抵抗」では、内田魯庵の「ロシア研究」が、魯庵の二葉亭理解や「社会主義」評価から論じられている。特筆すべきなのは、同時代イギリスのロシア研究者ベアリング（Maurice Baring, 1874–1945）らの「ロシア研究」を調査することで、日本／ロシア／イギリスという三ヶ国を横断する「三点測量」が比較文学的に行われていることだろう。思想面では、魯庵は「自由主義」の立場から、「社会主義」や「無政府主義」を「危険思想」として取り締まる政府に危機感を抱いていた。
第Ⅲ部「大庭柯公のロシア――志士・二葉亭四迷の後継としての観察と実行」では、大庭の「社会主義」と「ロシア研究」が扱われている。日露戦争（1904-1905）後にウラジオストクで拘禁された大庭のロシア語聖書などの貴重な資料をもとに、大庭の「社会主義」が吟味されている。さらに、第一次大戦下にロシアに特派員として赴いた大庭のルポルタージュが、同時代のイギリス人やロシア人による従軍ルポルタージュと比較されている。
以上のように、本書では二葉亭、魯庵、大庭の「経世済民」の思想が「ロシア研究」を媒介にして「三点測量」など比較文学的な手法で論じられている。終章では、この三者の思想が対外的な膨張主義に陥らなかった理由として、西洋文学・文化の素養が挙げられているが（433 頁）、幸徳秋水（1871–1911）、堺利彦（1871–1933）、大杉栄（1885–1923）らの「社会主義」「無政府主義」の影響も気になるところだ。いわゆる「初期社会主義」と「ロシア研究」が交差する点を吟味する上でも、本書は非常に示唆に富む一冊である。

秋季大会プログラム

２０２２年度日本比較文学会秋季九州大会

日時：２０２２年１２月３日(土)１３：００～１８：００
研究発表会場：福岡大学Ａ棟７階７０１教室
幹事会会場：　同上７０２教室
〒814-0180　福岡市城南区七隈８－１９－１
[redacted]
交通：①　地下鉄七隈線「福大前」駅下車。1 番出口を出て、道なりに５０メートルで正門。正門で左折し大学構内へ。建物④へ
②　西鉄バス 12 番で福大前下車。通用門から入り建物④へ
③　西鉄バスエコルライナー（快速）で福大正門前下車。正門から構内に入り、建物④へ
（キャンパス地図参照）

秋季大会プログラム

本大会は上記会場で対面開催いたしますが、同時にオンラインによる参加も可能です。開催の前日までに、支部事務局より ML に登録された皆様にミーティング ID とパスコードをお送りいたします。

一般の方で参加を希望する場合、支部事務局（九州大学・松枝佳奈）まで、電子メール（knmatsueda@scs.kyushu-u.ac.jp）でお問い合わせください。

幹事会は１２時より開催いたします。幹事の方はよろしくお願いいたします。

//

プログラム：

幹事会　　１２：００－１３：００

開会　　１３：００－１３：１０

総合司会　　林　信蔵（福岡大学）

支部長挨拶　　西槇　偉（熊本大学）

研究発表（１）　１３：１０-１３：４５

「魯迅とマーク・トウェイン―『イヴの日記』の翻訳出版をめぐって」

梁　艶（上海同済大学）

司会：秋吉　收（九州大学）

秋季大会プログラム

研究発表（２）　１３：４５-１４：２０

「現実超克の詩的散文―夏目漱石『夢十夜』と魯迅『野草』」

陳　雪（安徽大学）

司会：西槇　偉（熊本大学）

休憩　１４：２０－１４：３０

研究発表（３）　１４：３０-１５：０５

「アンナ・ゼーガースの毛沢東「受容」と「沈黙」―1950 年代前半を中心に」

中原　綾（東京大学大学院修了）

司会：徳永　光展（福岡工業大学）

休憩　１５：０５－１５：３０

シンポジウム　１５：３０－１７：２０

「人と移動研究推進体：さまざまな移動の視点から」

講師　下田　宙（山口大学）

杉井　学（山口大学）

司会　藤原　まみ（山口大学）

閉会の辞　１７：２０－１７：２５　岩本真理子（元北九州市立大学）

休憩　１７：２５－１７：３０

総会　１７：３０－１８：００

懇親会

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

研究発表要旨

（１）「魯迅とマーク・トウェイン―『イヴの日記』の翻訳出版をめぐって」

梁　艶（同済大学）

近年、「魯迅と世界文学」が注目されている中、魯迅の故郷である浙江省紹興市において、「魯迅と世界の文豪：時空を超える対話」というテーマのもと、様々なフォーラムが活発に開かれてきた。2020 年 11 月の、魯迅とマーク・トウェインとの対話フォーラムでは、中国における『イヴの日記』の翻訳と出版に関するエピソードも再び美談として報道された。魯迅のトウェインに対する高い評価、魯迅文学とトウェイン文学の根底に流れているユーモア、魯迅の白話文による小説の創作とトウェインのアメリカ口語方言による物語の執筆との異曲同工の妙などが、しばしば指摘されたものの、魯迅におけるトウェインの受容を論じた先行研究は、管見の限り、ほとんど見当たらない。本発表では、そのような研究状況に対して、まずは魯迅とトウェインとの重要な接点をいくつか明らかにしたい。そして、1930 年代における中国文壇の状況を踏まえながら、魯迅が『イヴの日記』の翻訳出版を力強く支えていた理由を考察する。最後に、それ以降の中国におけるトウェインの翻訳と紹介に見られる魯迅の影響を検討したい。

秋季大会プログラム

（２）　「現実超克の詩的散文―夏目漱石『夢十夜』と魯迅『野草』」

陳　雪（安徽大学）

魯迅文学は夏目漱石からの受容に関しては、学界で理智的批判性、滑稽性といった要素が注目されるが、魯迅が漱石文学の随筆的な作品に興味を寄せていたことにもっと留意してもよいと思われる。『野草』という散文には『夢十夜』と類似した文体基調が見うけられ、現実超克の孤独且つ憂鬱といった心の闇に映したリズムは時代的制約を超えた詩的想像力で表現されている。そうした「虚的」な色彩に溢れた散文化のジャンルは人間情念の精神的、感覚的世界をロマンチシズムの芸術観で表現したのに止まらず、近代化の特別な境地に身を置いた作家の「実心」ないし魂も投影している。さらに、二作は生死に関わる禅的な実存の哲学思想も秘めていると同時に、中日文学の異質性や時代性などの要素により、異なる心象風景を示すものといえる。

（３）「アンナ・ゼーガースの毛沢東「受容」と「沈黙」―1950 年代前半を中心に」

中原　綾（東京大学独文科博士課程満期退学）

毛沢東の『文芸講話』が初めてヨーロッパで紹介されたのは、1949 年 10 月 1 日のフランスにおいてのことであった。東ドイツの作家アンナ・ゼーガースは、この訳をいち早く入手して読了し、感激してドイツ語訳出版のアウフバウ出版社に働きかけた。そして、数年後には『文芸講話』の二番目のドイツ語訳に解題を寄せている。

だが、彼女は毛沢東の理論に賛同するばかりではなかった。1951 年に中国を訪問した際には、盟友胡蘭畦に関して、中国当局に配慮して「沈黙」する立場を余儀なくされている。

本発表では、1950 年代前半におけるゼーガースの毛沢東「受容」と「沈黙」を通して、東ドイツ体制側に取り込まれ批判しなかったとして、現代では評価のむずかしいとされるゼーガースの苦悩を読み解いていく。

（次ページにつづく）

秋季大会プログラム

シンポジウム：「人と移動研究推進体：様々な移動の視点から」

「人と移動研究推進体」は山口大学研究推進体に認定・採択された、移民、難民、観光、交通、感染症など、様々な「人と移動」に関する事象を研究対象とする研究プロジェクトである。本研究推進体の特色は、この広範な研究対象を学際的にアプローチすることによって、これまで十全に研究されてこなかった、山口県の人と移動に関連する有形・無形の歴史的社会的資産を包括的かつ多角的に捉え、そこから、山口大学独自の知の体系を創造し、それを教育へと還元する道筋を創造する点である。

本シンポジウムでは、研究プロジェクトメンバーが各自の専門領域に立脚して「人と移動」に関連した事象を研究した成果を発表する。今回のシンポジウムでは、各発表間の連携は微かで密やかである。比較文学会九州支部会会員の皆様と交流させていただく機会を通じて、変動的で不定形な本プロジェクトにおける、専門領域間の連携の可能性を模索していきたい。

（１）「動物の移動と感染症」

下田　宙（山口大学共同獣医学部、専門領域：人獣共通感染症など）

ヒトは航空機、船舶、車、鉄道等様々な手段で長距離を移動、さらには海を越えることができる。そのヒトの移動と共に新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の流行が拡がったことは周知の事実である。鳥、コウモリや節足動物もまたその飛翔能力によって海を越えることができる。今後起こり得るパンデミックは「ヒトや動物の移動」が関わることは明白である。本発表では「動物の移動」が感染症の広がりにどのように寄与しているのかについて最新の知見を紹介する。

（２）「ハワイ移民データベースを基に比較する移民者人物像」

杉井学（山口大学国際総合科学部、専門領域：理学）

明治初期に行われたハワイへの官約移民時代の渡航記録が残っている。電子化されデータベース化されたこのハワイ移民データベースは、渡航年、渡航者氏名、年齢、渡航前住所、同伴家族等が記録された貴重な情報である。官約移民時代だけで日本全土からの渡航者約 3 万人の記録があるが、現山口県周防大島町からの渡航者は約 4 千人に及ぶ。今回このハワイ移民データベースの基本統計量解析を行い、山口県周防大島町から渡航した人々とその他の地域から渡航した人々の属性の比較を行ったところ、前者に特徴的な家族渡航の様子が示されたので報告する。

（３）「ラフカディオ・ハーン作品と感染症」

藤原まみ（山口大学国際総合科学部、専門領域：比較文学・比較文化）

ヒトや動植物の移動によって、感染症や伝染病が広がっていく現象は、これまで様々な文化圏の文学テクストに表象され、それについての研究も盛んに行われてきている。本発表では文学と感染症との関係性を考察する一例として、ラフカディオ・ハーンのテクストを取り上げる。当時流行した感染症や伝染病に関する事象を、ハーンがいかに捉え、それが彼の他者や群衆表象にどのように関連しているのかについて考察する。

会員短信

古賀元章（福岡教育大学名誉教授）

近況、令和 3 年度の論文と口頭発表を報告します。

近況

1　博士論文と課程論文（博士論文）を書いています。それぞれの課題は、「姉崎正治の日蓮信仰の研究」と「T．S．エリオットの詩の研究――円環のイメージから脱円環のイメージへ――」です。

2　渋沢敬三の経営の特徴を研究するため、資料収集を行っています。

3　グローバル社会研究会を主宰していますが、運営と会員獲得に苦労しています。

論文

1　「少・青年期の渋沢栄一への父親と尾高惇忠の影響」『言語文化学会論集』（言語文化学会）56 号、令和 3 年 7 月

2　「渋沢栄一のパリ万国博覧会使節団の随行」『言語文化学会論集』（言語文化学会）57 号、令和 4 年 2 月

口頭発表

1　「宮本常一の民俗学への渋沢敬三の影響」、グローバル社会研究会第 7 回大会、令和 4 年 3 月 11 日

2　「グローバル社会における渋沢栄一の合本主義の利点と欠点」、グローバル社会研究会第 7 回大会、令和 4 年 3 月 11 日

大場健司（九州共立大学）

今年度、単著『1960s 失踪するアメリカ――安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（春風社、2022 年 12 月頃）を出版致します。日本文学／アメリカ文学の相互交通を扱っておりますので、ご笑覧頂けますと幸いです。

また、前年度の近況は次の通りです。

【著書】

①杨本明、大場健司、董春燕、郑新超『5 周突破新日语能力考试全真模拟试题 N1』（外语教学与研究出版社、2021 年 6 月）

②～⑥杨本明、大場健司他『高考日语满分宝典』シリーズ全 5 冊（上海交通大学出版社、2022 年 3 月）

【解説】

①「日本文化論における「縄文」の系譜学」（『宗左近・花の会会報』第 2 号、2021 年 7 月）

②「森元斎著『国道 3 号線――抵抗の民衆史』」（『九大日文』第 38 号、2021 年 10 月）

③「北九州市立文学館第 30 回企画展「詩の水脈――北九州 詩の 100 年」講演記録」（『宗左近・花の会会報』第 3 号、2022 年 2 月）

④「三浦雅士著『スタジオジブリの想像力――地平線とは何か』」（『九大日文』第 39 号、2022 年 3 月）

【口頭発表】

① "Existential Literature in Japan and its Influence on Postmodernism in the United States." *Existential Literature and the Ethics of Engagement*. National Taiwan University. May 14th, 2021.

事務局より

これまで計 34 号発行されました『日本比較文学会九州支部会報』に代わり、今年度、新たに『日本比較文学会九州支部 NEWSLETTER』が創刊されました。次号以降、皆さまの積極的なご寄稿をお待ちしております。比較文学への信念を新たにする素晴らしい巻頭言をお寄せいただきました清水孝純先生をはじめ、多くの先生方のご寄稿を賜りました。おかげさまで創刊号にふさわしい、大変充実した NEWSLETTER をお届けする運びとなりました。

2022 年 12 月 3 日（土）に福岡大学にて、九州支部秋季大会が対面・オンラインのハイブリッド形式で開催されます。当日、会員の皆さまにお目にかかりますことを心待ちにしております。

九州支部事務局　松枝　佳奈（九州大学）

日本比較文学会九州支部 HP:
https://homepagekumadai.wixsite.com/kyushu-shibu

日本比較文学会九州支部支部長
西槇偉（熊本大学）
[redacted]

日本比較文学会九州支部事務局
819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744
九州大学大学院比較社会文化研究院
松枝佳奈研究室
knmatsueda@scs.kyushu-u.ac.jp